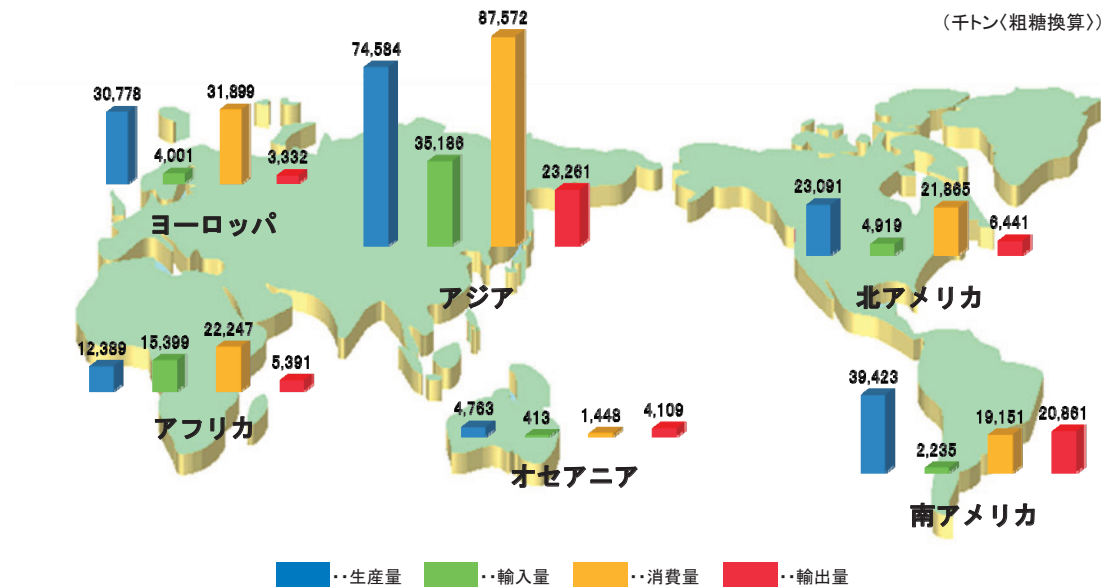


砂糖の国際需給

調査情報部 坂上 大樹、塩原 百合子

1. 世界の砂糖需給（2018年12月時点予測）

図1 絵で見る世界の地域別の砂糖需給（2018/19年度予測値）



資料：英国の民間調査会社LMC International「Quarterly Statistical Update, December 2018」

注1：年度は国際砂糖年度（10月～翌9月）。

注2：ヨーロッパには、EU加盟国とロシアほか17カ国を含む。

LMC International（農産物の需給などを調査する英国の民間調査会社）の2018年12月時点の予測によると（以下、特段の断りがない限り同予測に基づく記述）、2018/19砂糖年度（10月～翌9月）の世界の砂糖生産量は、前回予測から1.8%下方修正し、1億8503万トン（粗糖換算〈以下、特段の断りがない限り砂糖に係る数量は粗糖換算〉、前年度比4.9%減）とやや減少すると見込まれている（表1）。北アメリカやアフリカは前年度を上回る一方、ヨーロッパは天候不順によりてん菜の生産量が減少する見込みであることに加え、最大の生産国であるブラジルがサトウキビのエタノール生産への仕向け割合を増やしていることを受け、全体として生産が減少すると見込まれている。

同年度の世界の砂糖消費量は、前回予測とほぼ同じ1億8489万トン（同1.4%増）とわずかな増加が見込まれている。世界の砂糖需要をけん引するインド、中国が昨今の景気動向を反映し、引き続き消費量が堅調に増加すると見込まれるほか、人口増を背景にアフリカの消費量も増加が見込まれている。

この結果、2018/19年度は、生産量が消費量を上回るものの、生産量が減少する影響で期末在庫量が減少すると見込まれている。しかし、期末在庫率は40%台を維持すると見込まれることから、世界の砂糖需給は引き続き緩和傾向で推移するものとみられる。なお、地域別の砂糖需給は、図1の通りである。

表1 世界の砂糖需給の推移

(単位：千トン〈粗糖換算〉、%)

年度	期首在庫量	生産量	輸入量	消費量	輸出量	期末在庫量	期末在庫率
1989/90	29,879	108,244	27,973	105,790	29,126	31,180	29.5
1994/95	41,641	116,726	31,803	112,686	32,672	44,812	39.8
1999/2000	62,812	133,133	36,409	127,942	39,734	64,678	50.6
2004/05	63,697	144,251	47,084	146,907	50,426	57,700	39.3
2009/10	55,102	160,315	56,023	164,765	56,244	50,430	30.6
2013/14	63,414	184,058	58,323	175,214	61,044	69,537	39.7
2014/15	69,537	183,717	59,707	176,522	62,081	74,357	42.1
2015/16	74,357	175,955	67,776	179,679	69,077	69,333	38.6
2016/17	69,333	180,545	70,699	181,896	70,739	67,943	37.4
2017/18	67,943	194,476	65,748	182,295	67,364	78,507	43.1
2018/19 (2018年9月予測)	76,057	188,440	63,753	185,014	64,896	78,339	42.3
2018/19 (2018年12月予測)	78,507	185,027	62,152	184,888	63,394	77,404	41.9

資料：LMC International「Quarterly Statistical Update, December 2018」

注1：年度は国際砂糖年度（10月～翌9月）。

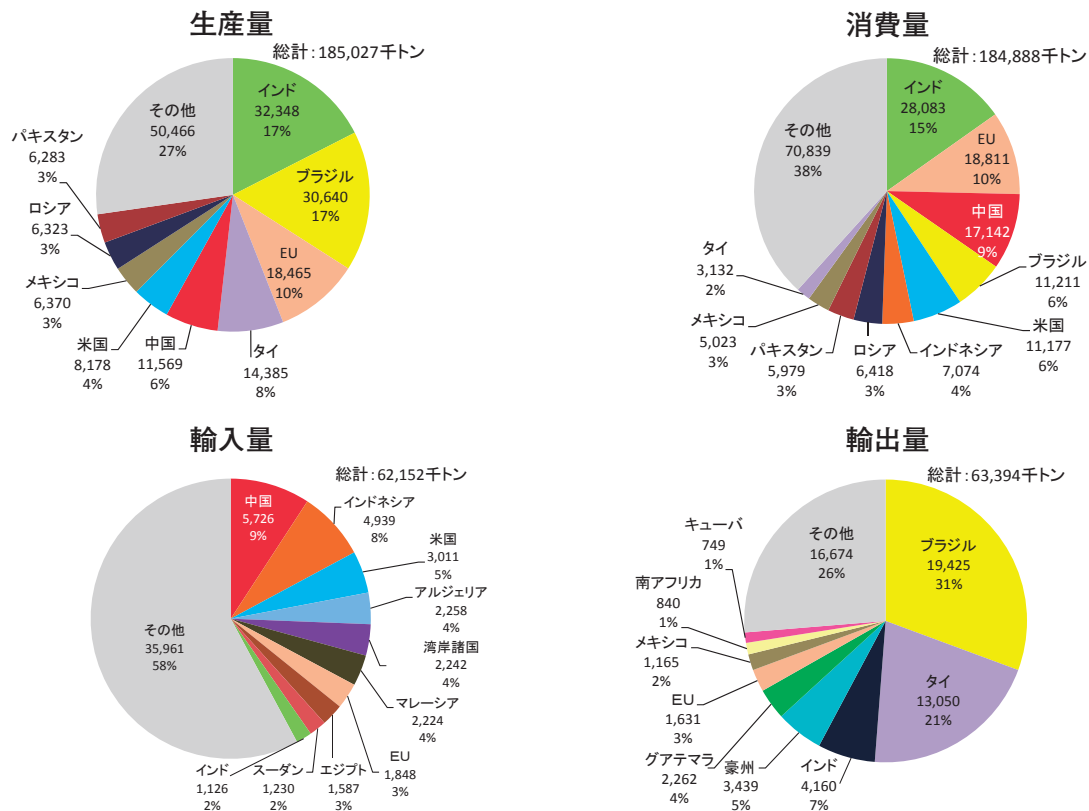
注2：2017/18年度および2018/19年度は予測値。

注3：期末在庫量は（期首在庫量＋生産量＋輸入量－消費量－輸出量）。

注4：期末在庫率は、期末在庫量を消費量で除した割合。

2. 主要国の砂糖需給（2018年12月時点予測）

図2 主要国の生産量、輸入量、消費量、輸出量（2018/19年度）



資料：LMC International「Quarterly Statistical Update, December 2018」

注1：主要国の年度は、各国の砂糖年度。

注2：主要国とその他を表示。

注3：「その他」は総計から主要国の計を差し引いた数値。

注4：輸入量のうち「沿岸諸国」は、アラブ首長国連邦、バーレーン、オマーン、カタールの合計。

【生産量】

2018/19年度の砂糖生産量を国別に見ると、インドは、砂糖生産量第1位のウッタル・プラデーシュ州で豪雨の被害を受けたほか、第2位のマハラシュトラ州と第3位のカルナータカ州で干ばつや害虫被害が発生した影響で生育が停滞していることから、3235万トン（前年度比6.8%減）とかなりの減少が見込まれている（図2）。ただし、他の作物より収益性の高いサトウキビへの生産意欲の高まりを背景に、過去最大を記録した前年度に次ぐ生産量を維持すると見込まれるため、結果として、ブラジルを抜き世界第1位の砂糖生産国になるとみられる。

ブラジルは6月から8月にかけて主産地の中南部を中心に乾燥した天候が続いたことで生育にマイナスの影響が出ているほか、砂糖の国際価格の低迷を受けサトウキビのエタノール生産への仕向け割合が7割に達する勢いで推移していることなどから、3064万トン（同26.2%減）と大幅な減少が見込まれている。

EUは、春先の寒波によりてん菜の播種^{はしゅ}が遅れたことに加え、記録的な猛暑に見舞われ、収量が大幅に低下するとみられることから、1847万トン（同14.6%減）とかなりの減少が見込まれている。

タイは、台風の勢力が弱まった熱帯低気圧が多く通過した影響でサトウキビの倒伏、茎葉の傷みなどが発生していることから、1439万トン（同7.7%減）とかなりの減少が見込まれている。

【輸入量】

中国は、砂糖への追加関税措置を継続する見通しであることから、573万トン（前年度比5.2%減）とやや減少すると見込まれている。また、インドも、砂糖の過剰在庫が解消される見通しが立っていないことから、前年度の半分に相当する113万トン（同51.3%減）まで減少すると見込まれている。

他方、インドネシアは、昨今の景気動向や人口が

右肩上がり推移していることなどから、494万トン（同18.4%増）と大幅な増加が見込まれている。

【消費量】

昨今の景気動向や個人消費が堅調に推移していることを踏まえ、インドは2808万トン（前年度比2.0%増）、中国は1714万トン（同1.2%増）、インドネシアは707万トン（同2.4%増）とわずかな増加が見込まれている。

他方、タイは、糖類を含む飲料に対する課税の本格的な運用が開始されることから、313万トン（同6.3%減）とかなりの減少が見込まれている。

【輸出量】

ブラジルは、砂糖の国際価格の低迷を背景に、砂糖の輸出に消極的でバイオエタノール生産を加速させる動きが見られることから、1943万トン（前年度比37.3%減）と大幅な減少が見込まれている。

EUは、てん菜の減産により砂糖生産量が消費量と同等の水準となり、輸出余力が低下するとみられることから、前年度の半分以下の163万トン（同57.2%減）まで減少すると見込まれている。

他方、タイは、内需が縮小するため、輸出意欲が高まるとみられることから、1305万トン（同29.5%増）と大幅な増加が見込まれている。

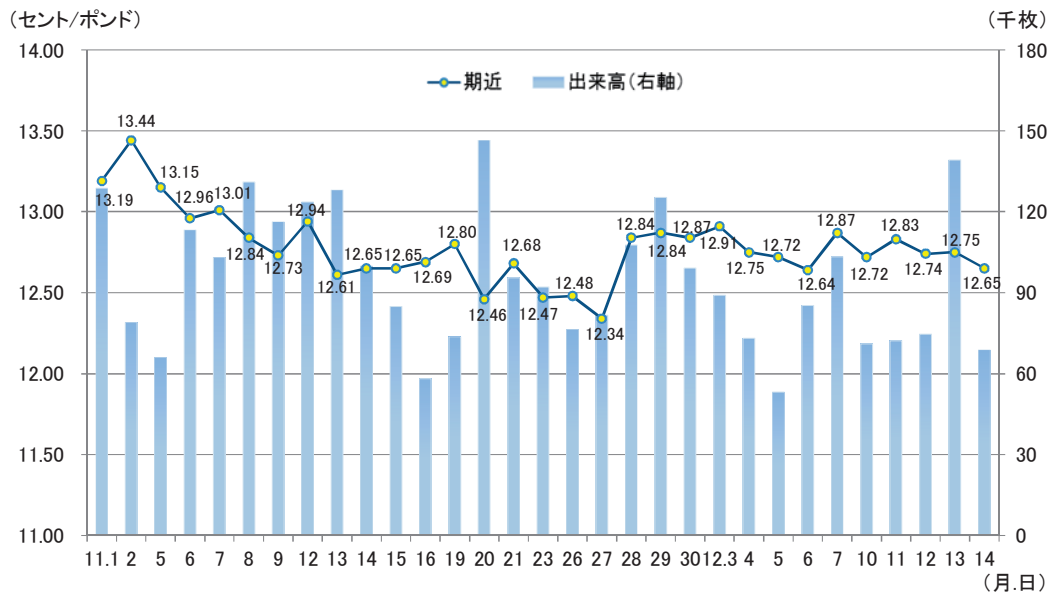
インドは、砂糖の過剰在庫の解消に向け、補助金政策や最低輸出義務の設定など、輸出に対する政府介入の度合いが強まるとみられるため、416万トン（同76.2%増）と大幅な増加が見込まれている。

3. 国際価格の動向

ニューヨーク粗糖先物相場の動き（11/1～12/14）

～総じてみ合いが続き、12セント台を維持～

図3 ニューヨーク粗糖先物相場の動き



資料：インターコンチネンタル取引所（ICE）
注：3月限の値。

ニューヨーク粗糖先物相場（3月限）^{がつぎり}2018年11月の推移を見ると、11月2日は、ブラジルサトウキビ産業協会（UNICA）^{（注1）}が前日に発表した10月の生産実績がかなり低水準であったことを受け、1ポンド当たり13.44セント^{（注2）}まで値を上げたものの、その後は買いが続かず再び下げに転じ、5日は同13.15セントとなった。その後も、相場を押し上げる材料が乏しく、じりじりと値を下げる展開となり、15日は同12.65セントとなった。16日は、主要砂糖生産国の減産見通しを受けて同12.69セントまで値を上げ、翌週の19日も続伸し同12.80セントとなった。しかし、20日は原油価格の下落に引きずられたことや、上がり基調の相場を受けて利益を確保しようとする売りが増えたことにより、同12.46セントまで値を下げ、約6週間ぶりの安値となった。21日は売られすぎた反動から同

12.68セントまで値を上げたものの、週明けの23日は再び下げに転じ、27日には同12.34セントまで値を下げた。28日は、前日に行われた世界貿易機関（WTO）農業委員会において、インド政府の砂糖政策に対する疑義が相次いだことで、インドの砂糖輸出に影響が出るとの見方から、同12.84セントまで値を上げた。

12月に入ると、砂糖の需給は緩んだ状況が続くとみられるものの、目新しい材料がなく、同12セント台後半でのみ合いが続き、14日は同12.65セントとなった。

（注1） ブラジル全体の砂糖生産量の9割を占める中南部地域を区域としている団体。

（注2） 1ポンドは約453.6グラム、セントは1米ドルの100分の1。

4. 世界の砂糖需給に影響を与える諸国の動向（2018年12月時点予測）

本稿中の為替レートは2018年11月末日TTS相場の値であり、1 インド・ルピー＝1.79円である。

ブラジル

2018/19年度（4月～翌3月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：869万ha（前年度比1.3%増）

生産量：6億200万トン（同6.1%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：3064万トン（同26.2%減）

輸出量：1943万トン（同37.3%減）

2018/19年度、砂糖生産量、輸出量ともに大幅に減少する見込み

2018/19砂糖年度（4月～翌3月）のサトウキビ収穫面積は、869万ヘクタール（前年度比1.3%増）とわずかな増加が見込まれている。一方、生産量は、北東部地域の全域と中南部地域の一部で高温少雨が続き、生育の遅れが見られることから、6億200万トン（同6.1%減）とかなりの減少が見込まれている（表2）。砂糖生産量は、サトウキビの減産に加え、堅調なエタノール価格を追い風に、サトウキビをバイオエタノール生産に仕向ける動きが加速すると予測されるため、3064万トン（同26.2%減）と大幅な減少が見込まれている。輸出量は、主要輸出相手国である中国が追加関税措置を実施していることなども影響して、1943万トン（同37.3%減）と大幅な減少が見込まれている。

中国の追加関税措置をめぐり、12月下旬にWTOのパネル設置を要求か

中国政府が課す砂糖への追加関税措置をめぐって、ブラジル政府が10月下旬にWTOの紛争解決手続きの一つである2国間協議を要請してから、一向に進展する気配が見られない。WTO協定では、2国間協議において60日以内に両国が合意できな

ければ、提訴した国が小委員会（パネル）の設置を求めることができると定めている。このため、ブラジル関係者の間では、60日目を迎える12月18日以降、ブラジル政府がこの定めに基づきパネルの設置を求めるのではとの憶測が広がっている。

UNICAは、「中国がセーフガードを発効して以降、ブラジルから中国への砂糖輸出量が前年の10分の1まで激減した。われわれが中国政府に期待することは、関税を元の水準に戻すことだ」と述べた。現地報道によると、ブラジル政府は中国政府に対し、中国が追加関税措置の終了期限と定める2020年半ばまでの間、ブラジルから輸入する砂糖に対し、毎年250トンを上限に関税率50%を適用するよう求めているとされる。

製糖業者、次年度に向けてエタノール生産設備へ投資の動き

現地報道によると、2019年1月に大統領に就任するジャイル・ボルソナロ氏がバイオ燃料の開発や普及を促進する姿勢を打ち出していることを受け、ブラジルの製糖業者の間で、バイオエタノールに関連した設備投資が活発化している。世界的な穀物商社の一つ、ルイ・ドレフュス・ホールディング傘下のBiosev社は、サトウキビのエタノール生産への

仕向け割合を現行の50%から90%へ引き上げる計画で、すでにこれに対応した施設の建設に着手したと発表した。また、大手製糖業者のUsina Coruripe社や中規模の製糖業者でも、バイオエタノールの生産能力を増強するために必要な投資を行っている。製糖業者の多くは、サトウキビのバイオエタノール生産への仕向け割合を高めることで世界

の砂糖需給を引き締め、現在低迷する国際価格を押し上げたいとの狙いもある。

ブラジル鉱山エネルギー省は、政府が2018年に施行した再生可能エネルギー促進政策「Renova Bio」により、バイオ燃料の需要は2018年の267億リットルから2028年には471億リットルまで増加すると予測している。

表2 ブラジルの砂糖需給の推移

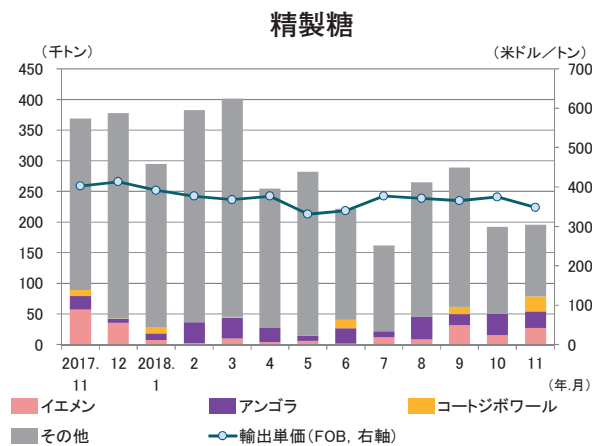
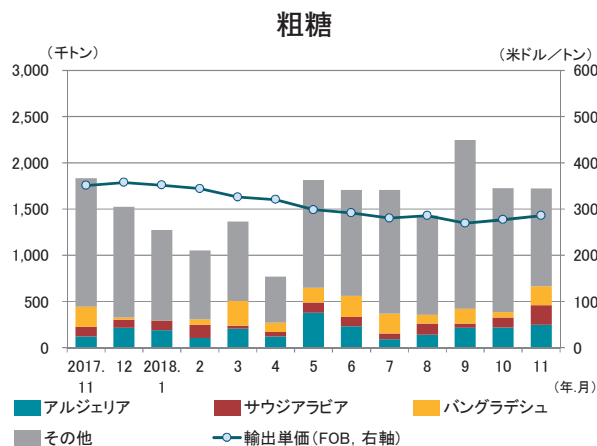
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	8,188	8,474	8,570	8,685	8,685	1.3
サトウキビ生産量	666,824	651,841	640,860	602,000	602,000	▲ 6.1
砂糖	生産量	36,472	41,670	30,710	30,640	▲ 26.2
	輸入量	1	4	3	3	25.0
	消費量	12,057	11,502	11,100	11,211	1.0
	輸出量	26,023	30,117	30,991	19,496	▲ 37.3
	期末在庫量	739	794	196	202	3.8
	期末在庫率	1.9	1.9	0.5	0.7	0.20 ポイント増

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) ブラジルの砂糖（粗糖・精製糖別）の輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1701.14（粗糖）および1701.99（精製糖）の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

インド

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：512万ha（前年度比6.1%増）
生産量：3億8122万トン（同3.1%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：3235万トン（同6.8%減）
輸出量：416万トン（同76.2%増）

2018/19年度、砂糖生産量は減少する一方、輸出量は大幅に増加する見込み

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビの収穫面積は512万ヘクタール（前年度比6.1%増）とかなりの増加が見込まれるものの、マハラシュトラ州やカルナータカ州において干ばつや害虫の大量発生がサトウキビの生育を阻害しており、3億8122万トン（同3.1%減）とやや減少が見込まれている（表3）。砂糖生産量についても、3235万トン（同6.8%減）とかなりの減少が見込まれている。輸出量は、政府が製糖業者に対し500万トンの最低輸出義務を課している影響で、416万トン（同76.2%増）^{（注）}と大幅な増加が見込まれている。

（注）2017/18年度の輸出量が前回予測から約50%下方修正（216万トン減）されたため、前年度比は前月号の8.0%減から一転して大幅増加となっている。

ウッタル・プラデーシュ州、2018/19年度のサトウキビ価格を据え置き

インドのサトウキビ生産量第1位の産地であるウッタル・プラデーシュ州の政府は11月下旬、2018/19年度のサトウキビの適正買い取り価格（SAP）を前年度と同額の1トン当たり3150ルピー（5639円）とすると発表した。サトウキビ生産者は、燃料代や肥料代、人件費などの生産コストが上昇していることを理由に、SAPを1トン当たり4000ルピー（7160円）まで引き上げるよう州政府に要求していたが、却下された形となった。州政府は、製糖業者の多くが現行のSAPでさえも生産者に払えていない状況などを踏まえ、SAPの引き上げは現実的ではないと判断したとみられる。

表3 インドの砂糖需給の推移

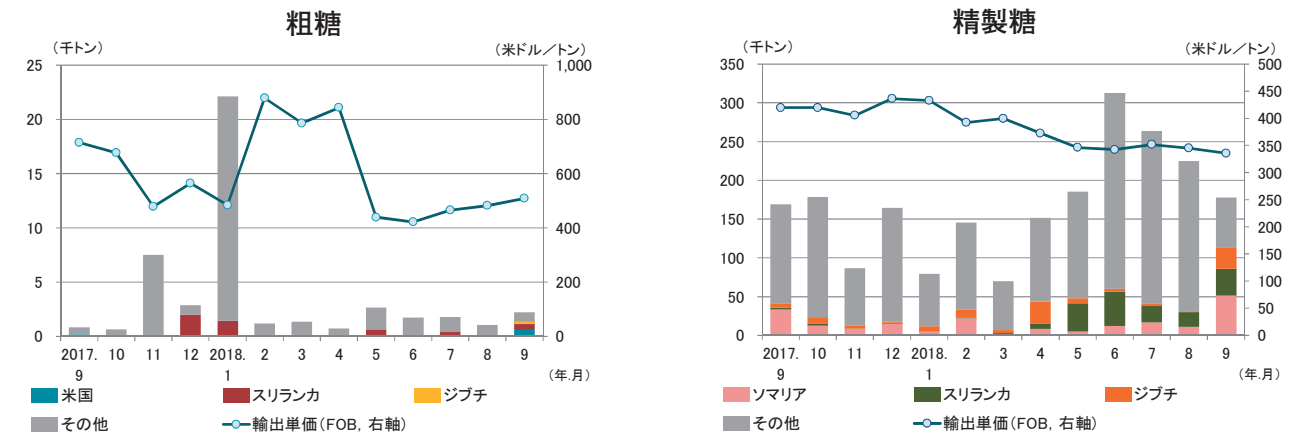
（単位：千ha、千トン、%）

年度		2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積		4,806	4,327	4,827	5,062	5,120	6.1
サトウキビ生産量		356,871	306,070	393,320	366,458	381,215	▲ 3.1
砂糖	生産量	27,091	21,848	34,720	33,426	32,348	▲ 6.8
	輸入量	2,146	2,536	2,311	1,126	1,126	▲ 51.3
	消費量	26,784	26,568	27,540	28,083	28,083	2.0
	輸出量	3,955	2,233	2,361	4,160	4,160	76.2
	期末在庫量	8,370	3,952	11,083	10,152	12,313	11.1
	期末在庫率	27.2	13.7	37.1	31.5	38.2	1.1 ポイント増

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) インドの砂糖（粗糖・精製糖別）の輸出量および輸出単価の推移



資料: 「Global Trade Atlas」

注: HSコード1701.14 (粗糖) および1701.99 (精製糖) の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

中国

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積: 126万ha (前年度比2.6%増)

生産量: 7889万トン (同2.8%増)

【てん菜】

収穫面積: 22万ha (同20.5%増)

生産量: 1118万トン (同16.6%増)

【砂糖（甘しや糖およびてん菜糖）】

生産量: 1157万トン (同3.8%増)

輸入量: 573万トン (同5.2%減)

2018/19年度、砂糖生産量はやや増加、輸入量はやや減少する見込み

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビの収穫面積は126万ヘクタール（前年度比2.6%増）、生産量は7889万トン（同2.8%増）と、ともにわずかな増加が見込まれている（表4）。てん菜の収穫面積は22万ヘクタール（同20.5%増）、生産量は1118万トン（同16.6%増）と、ともに大幅な増加が見込まれている。砂糖生産量は、7月～10月にかけて良好な天候に恵まれ、原料作物の増産が期待できることから、1157万トン（同3.8%増）とやや増加が見込まれているが、依然として消費量を大きく下回る水準である。輸入量は、573万トン（同5.2%減）とやや減少が見込まれている。

10月の砂糖輸入量、前年同月比で約2倍に増加

中国税関総署が11月26日に発表した2018年10月の貿易統計によると、砂糖の輸入に追加関税^(注)を課しているにもかかわらず、砂糖の輸入量は前年同月比99.1%増、前月比78.9%増の34万トンと大幅に増加した。10月は2018/19年度の開始月であるが、今年度の輸入量はわずか1カ月で前年度の約14%に達したことになる。ただし、国内の生産量では需要が追いつかない状況が続いているため、周辺国で生産された砂糖を国境が接するミャンマー経由で密輸入する業者が後を絶たない。その数量は正規の輸入量と同等もしくはそれ以上と言われていることから、実際の輸入量はさらに多いものとみられる。

(注) 追加関税は2017年5月から適用されており、その税率は1年目が45%、2年目が40%、3年目が35%と段階的に引き下げられることとなっている。

表4 中国の砂糖需給の推移

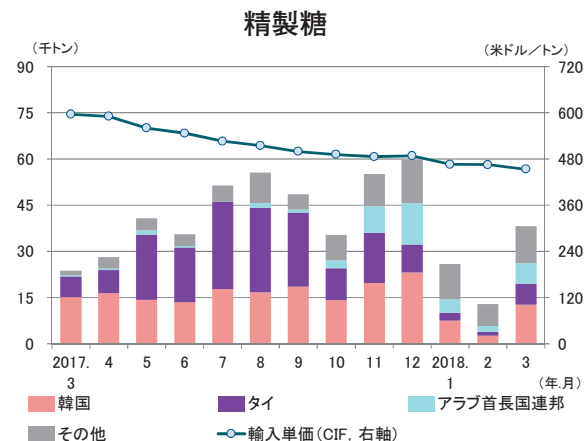
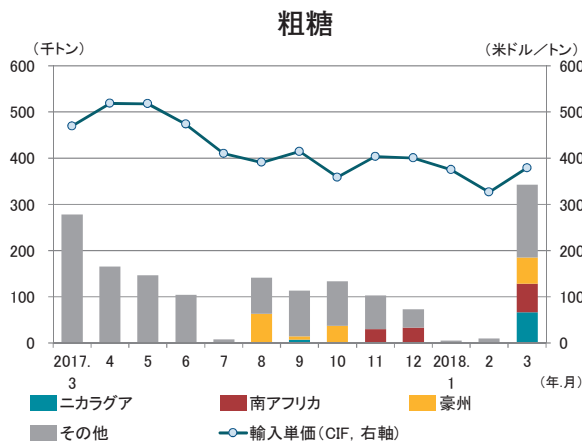
(単位: 千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
サトウキビ収穫面積	1,311	1,178	1,231	1,263	1,263	2.6
サトウキビ生産量	74,950	73,690	76,780	78,892	78,892	2.8
てん菜収穫面積	136	168	186	224	224	20.5
てん菜生産量	6,880	8,820	9,590	11,182	11,182	16.6
砂糖	生産量	9,405	10,041	11,569	11,569	3.8
	輸入量	7,910	5,715	5,600	5,726	▲ 5.2
	消費量	16,847	16,847	17,016	17,142	1.2
	輸出量	181	146	154	154	15.8
	期末在庫量	11,926	10,689	10,976	10,813	▲ 0.0
	期末在庫率	70.0	62.9	63.4	62.5	0.9 ポイント減

資料: LMC International 「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注: 期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) 中国の砂糖(粗糖・精製糖別)の輸入量および輸入単価の推移



資料: 「Global Trade Atlas」

注1: HSコード1701.14(粗糖)および1701.99(精製糖)の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

注2: 直近の情報を入手できなかったため、前月号の内容を再掲載する。

E U

2018/19年度(10月～翌9月)の見通し

【てん菜】

収穫面積: 171万ha (前年度比1.0%減)

生産量: 1億1675万トン (同14.6%減)

【砂糖(てん菜糖)】

生産量: 1847万トン (同14.6%減)

輸出量: 163万トン (同57.2%減)

2018/19年度、砂糖生産量はかなり減少し、輸出量は大幅に減少する見込み

2018/19砂糖年度(10月～翌9月)てん菜の収穫面積は171万ヘクタール(前年度比1.0%減)とほぼ横ばいで推移すると見込まれているが、生産量は1億1675万トン(同14.6%減)とかなりの減少が見込まれている(表5)。てん菜生産量の減少

に加え、てん菜の根中糖分が低いことも影響し、砂糖生産量は1847万トン(同14.6%減)とかなり減少する見込み。域内における異性化糖の供給不足を砂糖で相殺する動きが予測されるほか、砂糖の期首在庫量が減少していることを考慮して、輸出量は163万トン(同57.2%減)と、大幅な減少が見込まれている。

イタリア、2019年から砂糖税導入の見込み

イタリア政府の2019年度予算案は、欧州委員会から「国の財政赤字の削減ではなく、赤字拡大につながる可能性がある」との指摘を受け、イタリア政府は予算案の修正を求められていた。そこでイタリア政府は、2019年度の予算案の歳入拡大に向けた施策として、糖類を含む炭酸飲料に対する課税（いわゆる「砂糖税」）を導入する方針を打ち出した。与党幹部は2018年11月15日、「砂糖税の導入を盛り込んだ2019年度予算案は、年内2018年12月中に国会で承認される見通しである」と述べた。前出の幹部は、砂糖税の内容について「糖類を多く含む飲料に課税対象を限定する」と述べるにとどめ、詳細について明らかにしなかったものの、得られた税収は、主に砂糖税の導入で影響を受ける中小の小売店に対する減税対策や、教育関連の支援に充てられるとみられる。

2019/20年度の砂糖生産量、大幅に減少する可能性

EUの多くの砂糖業界関係者は、2019/20年度のEUの砂糖生産量について大幅に減少する可能性があるとの見方を示した。英国の農業団体は、昨今

の国際価格の低迷を受け、多くの生産者がてん菜の契約栽培面積を減らしていることを明らかにした。11月末にロンドンで開催された国際砂糖機関（ISO）の観測会議でも、民間の調査会社は、「EUの生産者の間で、てん菜からより収益性のある作物に転作する動きが広がっている」と述べた。このほか、ドイツの砂糖産業団体は、「ドイツの生産者は、2018年産の栽培面積を昨年産から7%程度縮小させたが、砂糖の国際価格の低迷が長期化すれば、さらに減少幅は大きくなる」と述べた。

他方、欧州委員会の決定^(注)により、2019年以降ネオニコチノイド系の農薬が使用できないことも、てん菜生産に影響を及ぼす可能性がある。フランスのてん菜生産者団体は、「甚大な害虫被害が発生した場合、てん菜の収穫量は最大で50%減少するだろう」と述べ、ネオニコチノイド系の農薬を散布する方法以外の有効な害虫防除法を早期に確立するよう求めている。

(注) 欧州委員会は2018年4月27日、ネオニコチノイドと呼ばれる農薬のうち、クロロアニジン、イミダクロプリド、チアメトキサムを主成分とする薬剤について、すべての作物への使用を禁止すると公表した。

表5 EUの砂糖需給の推移

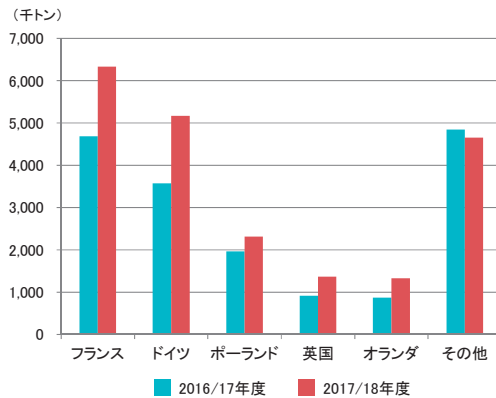
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	1,364	1,467	1,732	1,718	1,714	▲ 1.0
てん菜生産量	94,855	107,647	136,655	116,655	116,751	▲ 14.6
砂糖	生産量	14,937	17,521	21,625	18,438	▲ 14.6
	輸入量	3,651	3,115	1,731	1,576	6.7
	消費量	19,481	19,139	19,192	18,779	▲ 2.0
	輸出量	1,501	1,510	3,809	1,631	▲ 57.2
	期末在庫量	1,913	1,901	2,256	1,816	▲ 5.7
	期末在庫率	9.1	9.2	9.8	8.9	10.4
						0.6 ポイント増

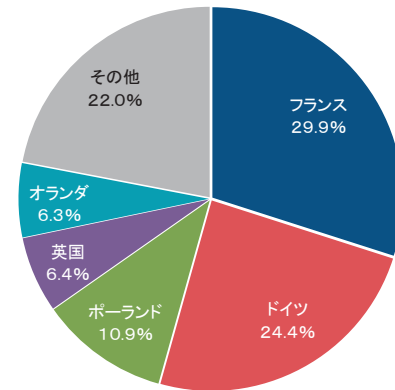
資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) EUの主要国別砂糖生産見通しおよび生産割合 (2018年9月時点)



資料：欧州委員会
注1：精製糖換算。
注2：2016/17年度は推定値、2017/18年度は予測値。



資料：欧州委員会
注：2017/18年度。

5. 日本の主要輸入先国の動向 (2018年12月時点予測)

近年、日本の粗糖（甘しや糖・分みつ糖〈HSコード1701.14-110〉および甘しや糖・その他〈同1701.14-200〉の合計）の主要輸入先国は、タイ、豪州、南アフリカ、フィリピン、グアテマラであったが、2017年の主要輸入先国ごとの割合は、豪州が69.5%（前年比17.3ポイント増）、タイが25.0%（同22.7ポイント減）と、この2カ国で9割以上を占めている（財務省「貿易統計」）。

豪州およびタイについては毎月の報告、南アフリカ、フィリピン、グアテマラについては、原則として3カ月に1回の報告とし、今回はグアテマラを報告する。

豪 州

2018/19年度（4月～翌3月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：39万ha（前年度比2.5%増）
生産量：3278万トン（同1.7%減）

【砂糖（甘しや糖）】

生産量：449万トン（同0.6%増）
輸出量：344万トン（同3.5%減）

2018/19年度、砂糖生産量はほぼ横ばい、輸出量はやや減少の見込み

2018/19砂糖年度（4月～翌3月）のサトウキビの収穫面積は、39万ヘクタール（前年度比2.5%増）とわずかな増加が見込まれるが、冬期（北半球は夏期）にクイーンズランド州とニューサウスウェールズ州で発生した干ばつの影響を受けて、生産量は、3278万トン（同1.7%減）とわずかな減少が

見込まれている（表6）。砂糖生産量は、449万トン（同0.6%増）とほぼ横ばいで推移すると見込まれている。また、輸出量は344万トン（同3.5%減）とやや減少すると見込まれている。

インド砂糖政策に対する疑義、WTO農業委員会で支持を獲得

サイモン・バーミンガム豪州貿易投資相は、11

月26～27日に開催されたWTO農業委員会の終了後、会議に出席した10カ国以上がインドの砂糖政策に疑問を呈する豪州政府の立場を支持したと明らかにした。この結果に対し、豪州砂糖製造業者協議会は「インドの補助金が輸出補助金に該当すると判断する明確な根拠を豪州政府が示したことが大いに役立ったのではないかと分析する。また、同協議会は「インドは、WTOが定める開発途上国に関する

ルールに基づき優遇措置を受けている。しかし、現在、インド政府が実施する砂糖産業への支援策は合理性に欠けており、インド政府は各国から反発を招くことを想定できたはずだ」とも主張した。

今後、豪州政府がWTOの紛争解決手続きに踏み切る可能性は低く、インド政府に対しWTO農業委員会を通じた協議で自主的に補助金を廃止するよう促していくものとみられる。

表6 豪州の砂糖需給の推移

(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	382	368	376	385	385	2.5
サトウキビ生産量	34,941	36,506	33,344	32,785	32,777	▲ 1.7
砂糖	生産量	4,889	4,797	4,490	4,489	0.6
	輸入量	164	68	29	29	0.0
	消費量	1,196	1,172	1,080	1,080	▲ 4.0
	輸出量	4,384	4,004	3,564	3,449	▲ 3.5
	期末在庫量	1,267	955	748	757	▲ 0.1
	期末在庫率	22.7	18.5	16.2	16.8	0.6 ポイント増

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

タイ

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：179万ha（前年度比0.9%増）

生産量：1億2500万トン（同7.4%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：1439万トン（同7.7%減）

輸出量：1305万トン（同29.5%増）

2018/19年度、砂糖生産量はかなり減少する一方、輸出量は大幅増の見込み

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビの収穫面積は、179万ヘクタール（前年度比0.9%増）とほぼ横ばいで推移すると見込まれている。生産量は、台風の勢力が弱まった熱帯低気圧が多く通過した影響でサトウキビの倒伏、茎葉の傷みなどが発生していることから、1億2500万トン（同7.4%減）とかなり減少すると見込まれている（表7）。また、主要産地の降雨量は例年より少なく、サトウキビの砂糖含有量が低下すると予測されるこ

ともあり、砂糖生産量は、1439万トン（同7.7%減）とかなりの減少が見込まれている。一方、輸出量については前年度のサトウキビの豊作により積み上がった過剰在庫を解消するため輸出を強化するとみられることから、1305万トン（同29.5%増）と大幅な増加が見込まれている。

サトウキビ生産量、2020年には1億トンに減少との予測も

サトウキビ・砂糖委員会事務局（OCSB）^{（注）}によると、2017/18年度のサトウキビ生産量の実績

は1億3500万トンであったが、2020年には1億トンまで減少すると予測される。これは、サトウキビの栽培面積が176万ヘクタールから144万ヘクタールまで減少すると見込まれているためである。タイ製糖協会も、砂糖価格が低迷する中、生産者はサトウキビより収益性の高いキャッサバの作付面積を増やす可能性があるため、今年度および次年度のサトウキビ生産量は減少するとみている。

他方、タイ政府は、ガソリン中のバイオエタノールの混合率を現行の13%から15%へ引き上げることを検討しており、これを達成するため、2020年までに現在1日当たり464万リットルで推移する

バイオエタノールの生産能力を同520万リットルに引き上げる計画である。これに伴い、サトウキビのバイオエタノールへの仕向け割合が上昇するため、砂糖生産量は、サトウキビ生産量の減少幅を上回って減少する可能性がある。

(注) サトウキビおよび砂糖関連政策の執行機関である3省（工業省〈製糖関係〉、農業協同組合省〈原料作物関係〉、商務省〈砂糖の売買関係〉）とサトウキビ生産者および製糖企業の代表で構成され、工業省内に設置された、サトウキビ・砂糖委員会（TCSB）の事務局。

表7 タイの砂糖需給の推移

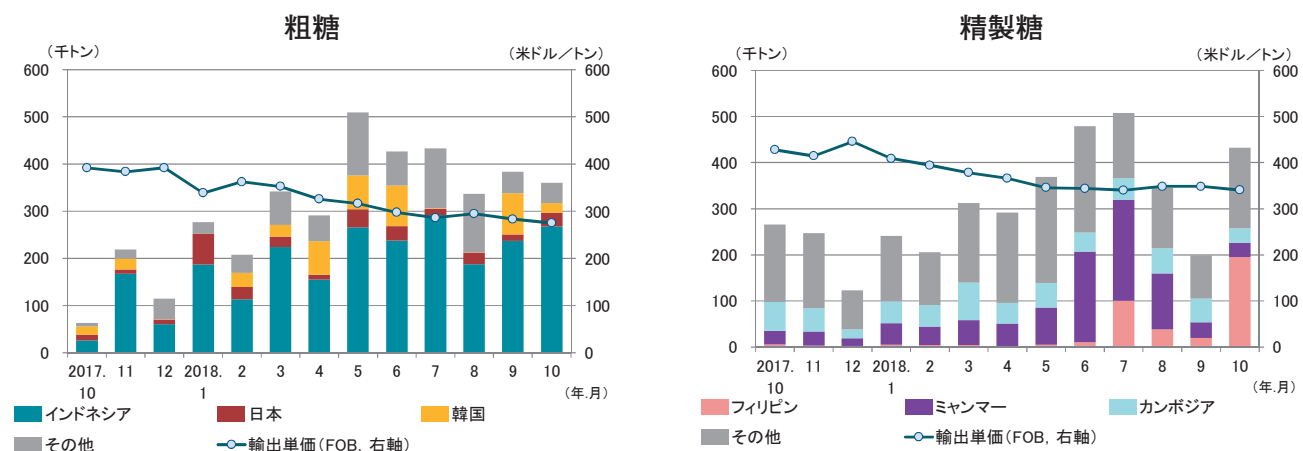
(単位：千ha、千トン、%)

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 (11月予測)	2018/19 (12月予測)	前年度比 (増減率)
収穫面積	1,644	1,578	1,776	1,792	1,792	0.9
サトウキビ生産量	94,047	92,951	134,929	125,000	125,000	▲ 7.4
砂糖	生産量	10,402	10,657	14,385	14,385	▲ 7.7
	輸入量	1	0	1	2	▲ 65.0
	消費量	3,272	3,283	3,343	3,294	▲ 6.3
	輸出量	7,932	7,393	10,077	12,887	29.5
	期末在庫量	3,970	3,951	6,123	4,161	▲ 29.3
	期末在庫率	35.4	37.0	45.6	25.7	18.9ポイント減

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。

(参考) タイの砂糖（粗糖・精製糖別）の輸出量および輸出単価の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコード1701.14（粗糖）および1701.99（精製糖）の数値。国別データは直近月の上位3カ国を表示。

グアテマラ

2018/19年度（10月～翌9月）の見通し

【サトウキビ】

収穫面積：26万ha（前年度同）

生産量：2559万トン（前年度比1.3%減）

【砂糖（甘しゅ糖）】

生産量：296万トン（同0.1%減）

輸出量：226万トン（同23.8%増）

2018/19年度、砂糖生産量はほぼ横ばい、輸出量は大幅に増加の見通し

2018/19砂糖年度（10月～翌9月）のサトウキビ収穫面積は26万ヘクタール（前年度同）と横ばいが見込まれている一方、生産量は2559万トン（前年度比1.3%減）とわずかに減少すると見込まれている（表8）。

砂糖生産量についても、296万トン（同0.1%減）とほぼ横ばいになると見込まれている。輸出量については、226万トン（同23.8%増）と大幅に増加すると見込まれている。

砂糖業界、持続可能性に向けた公約を発表

グアテマラ砂糖協会（Guatemalan Sugar Association、ASAZGUA）は2018年夏頃、国連が定める持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals、SDGs）^{（注）}に基づき、2025年までに砂糖業界が達成すべき目標を以下の通り定めたと発表した。

- 1：再生可能エネルギーの研究の促進と、関連インフラおよび技術への投資を促進する
- 2：製品ライフサイクルを通じて化学物質やすべての廃棄物の環境に配慮した管理を達成する

- 3：天然資源の持続可能な管理および効率的な利用を達成する
- 4：若者や障害者を含むすべての男性および女性の雇用と同一労働同一賃金を達成する
- 5：特に女性労働者の権利を保護し、安全・安心な労働環境を促進する
- 6：女性、子ども、高齢者および障害者を含め、人々に安全で利用が容易な公共スペースへのアクセスを提供する
- 7：技術開発、研究および技術革新を支援する
- 8：WTOのルールに基づいた平等な多角的貿易を促進する
- 9：技術向上および技術革新を通じた高いレベルの経済生産性を達成する

また、焼き畑による収穫の実施率を50%削減し、温室効果ガスの排出抑制に努めるとともに、これに伴い職を失う可能性のある労働者を含めた2000人程度を対象に、ハーベスタなどの機械オペレーターを育成することを目標に盛り込んだ。ASAZGUAは、「砂糖産業は、今後もグアテマラの経済を支える基幹産業としてあり続けるため、今回の目標を必ず達成する」と述べた。

（注）国連によると、持続可能な開発目標（SDGs）（通称「グローバル・ゴールズ」）は、貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにするため、世界が一丸となって達成すべき目標とされている。

表8 グアテマラの砂糖需給の推移

（単位：千ha、千トン、%）

年度	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19 （9月予測）	2018/19 （12月予測）	前年度比 （増減率）
収穫面積	269	256	264	264	264	0.0
サトウキビ生産量	27,987	25,835	25,936	27,517	25,588	▲ 1.3
砂糖	生産量	3,039	2,927	2,965	2,860	▲ 0.1
	輸入量	0	0	0	0	-
	消費量	839	861	879	898	2.1
	輸出量	2,210	2,164	1,827	1,962	23.8
	期末在庫量	858	761	1,019	766	▲ 19.4
	期末在庫率	28.2	25.2	37.7	26.8	11.7 ポイント減

資料：LMC International「Monthly Sugar Information in Major Countries, December 2018」

注：期末在庫量、期末在庫率および各項目の前年度比は、端数処理の関係で表中の値の計算結果と一致しない場合がある。